

令和5年度

広島市平和記念式典訪問団 レポート集



令和5年8月6日 長野県 駒ヶ根市

目次

「過ちは繰り返しませぬから」	赤穂中学校3年	田中 結菜
「広島で学んだこと」	赤穂中学校3年	西山 智晃
「核兵器のない世界へ」	赤穂中学校3年	藤井 祐匡
「未来を託された僕たち、私たち」	赤穂中学校3年	藤満 優樹
「初めての広島」	東中学校3年	片桐 照久
「平和への想い」	東中学校3年	市ノ瀬 篤志



令和5年度広島市平和記念式典訪問団の皆さん

「過ちは繰り返しませぬから」

赤穂中学校 3年 田中 結菜

今から78年前の8月6日、一つの大きな爆弾が数え切れないほどの命の夢を奪いました。原子爆弾が投下される前まで、今の私達と変わらない、人々の日常がありました。あの日、広島は悲しみと絶望の渦に包まれました。私は、広島平和記念式典に参加させていただき、これから作っていく私達にできることを深く考えることができました。

平和祈念式典では、何よりも、平和への誓いがとても印象的でした。「原子爆弾は、生き残った人々にも心に深い傷を負わせ、生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。」という、平和への誓いの一文が私の思い違いに気づかせてくれました。悲しみに暮れた当時の被爆者らは、生き残った喜びを感じるよりも、生き残ったことに対して自分を責める思いだったのです。そんな思いに触れて、自分は原子爆弾が起こす苦しみに対して少し軽い気持ちだったのではないかと考え直しました。

平和祈念資料館では、原爆の熱で溶けて潰れてしまった自転車や、被爆者が着ていた、焦げてぼろぼろの服を見ました。どれも原爆の威力がわかるような姿になっていました。なかでも、人影の石が忘れられません。人影の石は、爆心地から約260メートルの銀行の入り口にある石段です。この階段に座っていた人は逃げることもできずに亡くなったと思われます。石段は原爆の熱線に変色し、腰掛けていた部分は影のように黒く残ったそうです。本当に黒くなっていて座っている姿が想像できました。あの日の広島にはちゃんと人がいて、いつも通りの今日を過ごそうと思っていたのだろうなと感じました。ここにいた方は、爆心地からも近く、何が起きたのかも分からないままだったと思います。他にも誰にも看取ってもらえなかった方、会いたい人に会えなかった方など、様々な思いのまま亡くなった「人」がいたのでしょうか。考えるだけで悲しく、苦しい気持ちになりました。

原爆ドームは写真で見るとより損傷の激しさを感じました。外壁が崩れかけていたり、むき出しになっていたりました。これが原爆の恐ろしさなのだと、現実を突きつけられます。

私は広島原爆記念碑に刻まれた「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませぬから」という碑文に主語がないことを事前学習で知りました。私が思う主語は「世界の全ての人」です。今、当たり前の日常を送れている私は、幸せを感じます。でも、今この瞬間も、あの時の人々のように悲しみと絶望の渦の中にいて、生きていくことへの苦しみを感している人々がいることも事実です。それは、今も戦争が続いているからです。

誰かが平和を作ってくれるわけではありません。核兵器をなくし、平和な世界にできるのはこれから作っていく私達です。私はこれ以上の過ちを繰り返したくありません。

過去を学び、人々の思いを知り、自分の考えを持ち、多くの人々と語り合うこと、これが今の私達にできることだと考えます。



「広島で学んだこと」

赤穂中学校 3年 西山 智晃

学校の授業で被爆地である広島と長崎について勉強し、それを通して実際にこの目で見たいと思っていました。幸運にも駒ヶ根市が募集した広島市平和記念式典参加事業に訪問団として参加できることになり、自分の視野を広げる機会ができたことに感謝の気持ちでいっぱいでした。

平和記念式典に参加した 8 月 6 日は、話で聞いた原爆投下の日と同様にとても暑い日でしたが、多くの参列者と一緒に現地で平和への祈りを捧げることができました。

平和記念式典会場には、被爆者やご遺族の方々をはじめ岸田首相など、過去最多となる 111 か国の代表者が参列し、たくさん用意された大きなテントの中が約 5 万人もの参列者でいっぱいでした。代表で挨拶した方々の言葉で共通していたのは「戦争を起こしてはならない」という平和への願いでした。中でも知事の挨拶で「核兵器が平和維持に必要という人たちに、万が一その核を使ってしまった場合に全人類や地球上の全ての命に責任が取れるのかと、こんなことになるとは思わなかったと逃げるのではないかと」という内容の言葉が強く印象に残りました。それは自国に核兵器を落とされたことがなく、それによる被害と残された人々の悲しみを知らないからこそその言葉であると思うからです。私はそんなことを言う人が一人もない世の中になってほしいと思いました。

その後見学した平和祈念資料館では、広島での原爆投下前までの笑顔あふれる様子が展示された明るい部屋から一変して、「失われた人々の暮らし」と掲げられた原爆投下後の写真が展示された部屋は薄暗く、雰囲気すらも全く異なり当時の人々の心情を表しているように感じました。

原爆が落ちた後の写真の中には、ぼろぼろになった子供服や、人がいたからそこだけ焼けずに影が残った「人影の石」があり、骨すら残さず一瞬にして亡くなってしまった原爆の威力のすごさを知りました。その他にも、放射線によって苦しみながら亡くなってしまった人や、今も後遺症に苦しんでいる人がいることを学び、とても心が苦しくなり悲しくなりました。

今、世界では核保有国であるロシアがウクライナへ侵攻して長期化し、世界中が困っています。また、北朝鮮では毎月のように核兵器が搭載可能なミサイルの発射実験を行い、時には Jアラートが発令されています。私はそんな国のトップの人たちにこの資料館に足を運んでもらい、核兵器や戦争の恐ろしさについて感じてほしいと思いました。

私は被爆地である広島に行き、現地で学ぶことができました。核兵器がない世界を作れるように、学んだことや感じたことを周りにも伝えていきます。素晴らしい経験の機会を与えていただきありがとうございました。

「核兵器のない世界へ」

赤穂中学校 3年 藤井 祐匡

先日行われた広島平和記念式典に参加して、戦争や核兵器の恐ろしさを再確認しました。そして、人類は二度と核兵器を使用してはいけないと強く思いました。

核兵器は一度使用しただけで、数えきれない命を奪います。その中には、人間だけでなく自然に生きる動物や昆虫、植物たちまでもが一瞬にして焼き尽くされてしまいます。そうすれば生態系は崩れてしまい、生き残ったわずかな命も失ってしまいます。たった一度使用しただけで、これだけの命が失われてしまいます。これだけの犠牲があるにもかかわらず、核兵器を威嚇に使用する国があります。現在、ロシアはウクライナに対して「核の威嚇」をしています。一つの国が核兵器を使用すれば、他の国でも核兵器が使用されてしまうかもしれません。世界には広島や長崎に落とされた原子爆弾「リトルボーイ」や「ファットマン」などとは比にならない威力の核兵器がとんでもない数存在しており、それを使った戦争、核戦争などというものが起こったら、人間や動物たちは疎か、地球そのものがなくなってしまいます。そうならないためにも、核兵器の恐ろしさを周りの人に伝え、絶対に戦争をしないと一人一人が考えることが重要だと思います。

現在、日本は戦争反対と表向きでは言いながらも、増税してまで防衛費を2倍近くに増やそうとしています。平和祈念式典でも、岸田総理は「核兵器のない世界実現に向け、引き続き積極的に取り組む」と言っていました。言っていることややっていることが矛盾しています。このままではいずれ日本は戦争をし、核兵器を使用する日が来ってしまうかもしれません。戦争被ばく国である日本が過ちを犯すことだけは絶対にしてはいけません。

日本は、戦争被ばく国であると同時に、核兵器の恐ろしさが一番わかる国でもあると考えました。核兵器の恐ろしさを国民全員が考え、それを世界中の人々に伝えていけば、戦争や核兵器のない平和な世界の実現につながると思います。

「未来を託された僕たち、私たち」

赤穂中学校 3年 藤満 優樹

僕はこの夏、広島での平和式典に参加しました。参加した理由はロシアとウクライナが戦争していても核が使われたらどうになってしまうかというのを落ちた広島に行き、見てみたかったからです。核が怖いということは社会の授業やテレビのニュースなどでよく知っています。しかしニュースや新聞に書いてあることはあの悲劇のほんの一部しかのせていません。やっぱり自分の想像とはだいぶ違いました。そこで僕が見たり聞いたものをそのままお伝えします。まず最初は演説からです。代表の子どもや大人の方が日本人にも外国人にも核の怖さというものを訴えていました。しかし、核を持つことで抑止力になると信じて核をたくさん持っている国は参加していませんでした。平和を信じている国や核を持つかどうか迷っている国に対して言ってもあまり意味がないように感じます。それから、演説だけではあまり想像はできないと思います。なぜなら言葉では表せないようなことがあるからです。だから広島に来た人は必ず原爆資料館に行った方がいいと思います。どれだけ想像できなくてもここに行けば必ずといっていいほど原爆の怖さを思い知ることができると思います。被爆者が書いた絵や実際の写真、身に付けていた物が展示されています。この中で特に印象に残った絵は「水をくれ」「水をください」という声を出す人を描いたものです。大切な人を一瞬で亡くし、当たり前の日常や未来を奪いました。しかし悲しみを受け止め、立ち上がった被爆者は、僕たち、私たちに平和な広島を創ってくれました。今度は僕たちの番だと思います。二度と78年前の悲劇を繰り返さぬように、相手を受け入れ、思いやりの心を持ち、相手を理解することが、戦争や核を使うことを止める一番の武器だと思います。未来を託されているのは僕たち、私たちです。今回感じたことをいろいろな人に伝えていこうと思います。

「初めての広島」

東中学校 3年 片桐 照久

8月6日、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加してきました。

朝から蝉がせわしく鳴いて駒ヶ根とは違う蒸し暑さの中、式典が行われました。

粛々と式が進む中でこども代表による平和への誓いを聞きました。その時僕が一番心に残ったのが、

「誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます」

という最後の言葉でした。まだ小学6年の子どもがこんな立派なことを言うことに感服させられました。原爆投下により広島・長崎の人たちが沢山の命を落とし、助かってもなお原爆症で苦しめぬいて必死の思いで生き抜いてきたことを、「平和」とはなにかということ強くたくましく考えているこどもたちがすごいと思いました。

式典が終わった後で慰霊碑で参拝し、亡くなった死没者を偲び「どうぞ安らかにお眠りください」と心の中で唱えてきました。

その後原爆資料館で様々な写真や展示物を見てきました。最初は活気あふれる街並みの様子が大きな写真で写されていました。次にはその光景が原爆によってほぼ更地に近い状態まで壊滅していて悲惨な光景が広がっていました。全身やけどで皮膚がただれていた人の写真のとなりに「助けて」「水をください」「動く気力もない母親のもとにすがる幼児」などといった当時の凄惨さを感じさせる様々な文章がありました。その文章の中で僕が一番ひどいことだなと思ったのが、「頭部は焼きちぢれ、顔、腕、背、足のいたるところの火ぶくれが破れ、やけどの皮膚がぼろい布のように垂れ下がる。頬に涙が伝い、ファインダーを通す情景がうるんだ。」「まさに地獄だ」その光景を写真に収めた人の言葉でしょうか、本当に悲惨だったんだなと考えるだけで胸が苦しくなる思いでした。展示されているものの中には絵もありました。全身が真っ赤で皮膚がただれながら彷徨う人の絵や、目から落ちてきた眼球を手で支える子どもの絵など、それは決して大げさに描いていないのが本当に原爆が恐ろしいものだと痛感しました。

その後も乾いたのどを潤すため、「黒い雨」を口で受ける人や、黒い雨に打たれ、洗濯しても黒い色のままの衣類などがありました。

核の力は原子力発電や放射線治療など人の役に立つことができます。ですが、使い方を間違えると何十万人、何百万人の命を奪うことになってしまいます。ちゃんと正しい使い方をして二度とあのような惨劇が起きないようにしてほしいと思いました。

今回の事業は平和式典や原爆資料館などを通して原爆の恐ろしさや平和についてとても深く学べる貴重な経験になるので、来年、再来年も多くの駒ヶ根の子どもたちに学んでほしいと思いました。

「平和への想い」

東中学校 3年 市ノ瀬 篤志

1945年に初めて原子爆弾が投下されました。あの日、広島で起きた事を風化させず、未来へ繋ぐために、僕は広島の平和記念式典に参加し、原爆ドームを人生で初めてみました。特に印象に残っている事が3つあります。

1つ目は、原爆ドームをみて、肌で感じた原爆の恐ろしさです。78年前に、広島の地で起きたと思ったら言葉が詰まりました。しかし、それは現実で起きた事なのです。爆弾が投下され焼け野原となった広島。水を求めて歩き続ける市民。今も苦しんでいる原爆症の方々。一人一人の思い、心情を考えようとしても考えられません。原爆ドーム・原爆がどれだけ悲惨である事をたくさんの人に知ってもらう必要があると強く思いました。

2つ目は、平和記念式典で強く思った、平和への思いです。岸田総理や、広島県知事が強く訴えていました。ロシアによるウクライナ侵攻にもふれていて、誰よりも平和への思いが伝わりました。平和記念式典はたくさんの国々に伝える重要な場でした。小学生が発表する、「平和の誓い」では、各国の代表者などに呼びかけていました。

3つ目は、原爆資料館で特に自分が感じた外国人の姿です。欧米やアジアなどたくさんの国の人々がいましたが、1人1人が原爆に向きあい、必死に考えていました。原爆資料館では、被爆した方の服などがありました。こげていたり、やぶれていました。自分も言葉が出なくなっていました。

今回の平和記念事業に参加でき、うれしく思います。自分は原爆資料館に行ったり、原爆ドームをみたり貴重な経験ができました。あの日の出来事を風化させないようにしたいです。